

家を聴く—音で写真集をつくろう— MOMASサウンドスケープ サウンドモニタージュワワークショップ

2014年7月19日・20日 埼玉県立近代美術館講堂

は じめて見るのに、かつて見たことがあるような気持ちで見えてくる現象を「デジャヴu déjà-vu」といい、反対にふだん見慣れているはずなのに、はじめて見るような新鮮さで見えることを「ジャメヴu jamais-vu」といいます。いずれも、それを見ている側のその時どきの意識のあり方が大きく影響をあたえていると考えられます。

私たちがとりかこんでいる日常的な風景の中には、きわめて多くの、とらえきれないほどのディテール(細部)があり、私たちはそれらのすべてを注視して意識の中にとどめておくことはできません。私たちが見ている日常の風景は、私たちが見た瞬間にすでに見る側によって選ばれた対象物によって構成された光景だといえます。でも、ときにそれらの光景のなかでふだん私たちから見過ごされているディテールが、突然何かの原因で意識化されるような状態がデジャヴuやジャメヴuであると考えられます。

今年の、**生形三郎さん**(オーディオ・アクティビスト)とともに実施した(サウンドモニタージュワワークショップ)では、日常的な光景を視覚的な要素ではなく、音から意識化することをテーマにして、一人1台の録音機を持って、美術館の周辺の街の音などを録音しました。また、ワークショップを実施した講堂では、参加者が持っている日用品から音を出し、それらの音を同様にレコーダーで録音しました。その際、美術館周辺の「音の風景」や、ふだん何かの目的で使用している日用品をたたいたり、こすったりすることで出てくる「物音」は、録音機のマイクによってとらえられ、ヘッドフォンをとおして参加者の耳に伝えられます。そ

うしたプロセスは日常的な物音を意識化する上で、とても有効な方法でした。

その後、それらの音をコンピュータ上で切り取り参加者独自のアイデアで音楽を作りました。そうしてできあがった音楽作品は、その日その時の「音の写真集」として位置付けることができます。その写真集は、オーディオCDとして焼き付けて参加者に持ち帰ってもらい、自宅で鑑賞してもらうよううながしました。そのCDを参加者が自宅で聴くということは、ワークショップでつくった「音の写真集」と、それぞれの家庭で鳴っている「日常的な物音の風景」の二つのレイヤー(層)が重なって聞こえている状態をつくりだします。ワークショップでつくった「音の写真集」が、それぞれの家庭の「音」を再発見し、意識化するための窓のような役割を果たすことをねがいます。

今年は二日間にわたり、美術館を訪れている方がたが自由な時間に参加できるオープンなフレームで実施したために小学生から大人まで、30分ほどの参加から、昼食をはさんでの2時間あまり没頭しての参加まで、さまざまな参加者がありました。二日目の最後には、参加者がつくった音楽作品を、会場に並べた4台のスピーカーから再生するミニコンサートを実施しました。今回のワークショップでは**(株)タスカムさん**のご協力により20台の録音機をお借りできたことで、参加者一人1台というぜいたくな制作環境を実現できました。この場をお借りしてお礼申し上げます。(参加:94人) **柴山拓郎(SMF運営委員)**



美術の模擬授業 親子でつくろう! びじゅつのじかん

2014年7月26日 さいたま市市民活動サポートセンター

あなたと
どこでも
アート
小さな家
プロジェクト

親 子でつくろう! びじゅつのじかん)は、中学校の美術の授業を親子で体験してもらおうというプログラムです。今回は「家」をテーマとした2つの授業をとおして、身のまわりの生活空間や家族を題材にして作品を制作することで、あらためて考えたり感じたりする時間を参加者の方がたにつくりたいと考えました。

中学校の美術の授業は、感じ取ったことや考えたことを絵や彫刻などで表現したり、伝えることや使うことなどの目的や機能を考えてデザインや工芸などで表現したりする活動をとおして、発想や構想の能力が高められるよう題材が工夫されています。その考えをもとに考案された2つの授業を学校の外でおこなうことで、ひろく美術の時間の魅力を発信しようというのが、このワークショップのねらいです。

当日の参加親子は17組で、小学生とその保護者のペアが多く見られました。参加の動機は、「中学校でおこなう授業に興味があった」や「ものをつくるのが好きだから」というものでした。

授業1 「気持ちを伝える明かりをつくろう」

明かりを置く空間と、明かりを送る相手へのメッセージを考えて、針金や和紙を用いてルームライトを制作する授業。



今回のワークショップで得たことは、つぎの二つです。

一つ目は、ふだん自分が美術教師として中学校でおこなっている授業と題材を、改めて見直す機会を得たことです。この授業づくりをとおして、明かりについて掘り下げていき、明かりがある所には人の存在があり、「明かりとは命の証明である」という題材観を確立できました。

二つ目は、制作・鑑賞の体験をとおして参加者の自己理解・他者理解が深まっているという実感を得られたことです。一人ひとりが自分の気持ちと向き合い、作品への思いを深めていった姿が印象的でした。また鑑賞では、ふだん親子の間ではあまり言葉にする機会のないおたがいの本音や感謝、励ましの気持ちなどを発表しあう場面を見ることができ、美術の授業が持つ力を改めて感じました。

山口愛(美術科教諭・埼玉県)



授業2 「親子でつくる、「居心地」のいいカタチ」

さまざまな美術作品がカードになった「アートカード」で作品の見方を楽しみ体験し、親子で理想の家についてのキーワードをさがし、そのキーワードをもとに、スポンジアートペーパー(水につけるとふくらむ紙)を使い、自分たちの生活空間に生かせるフォースタンドを制作しました。



親子が共有できる「家」というすてきなテーマからは、「いごち(居心地)」というカタチのないキー



ワードを設定しました。それは、作品をつくるのが目的ではなく、その活動をとおして共有する「じかん」そのものをつくるワークショップにしたかったからです。同じ空間に住んでいても、それぞれに感じ方はちがいます。カタチのないものをなかだちとしての交流には、その親子だからこそその発見があります。この授業ではアートカードを切り口にするこで円滑にコミュニケーションをとることができました。制作したフォースタンドは、親子でつくった「じかん」を思い出すためのスイッチになればと思います。これを家に置いて家族の写真をかざり、これからもカタチのないことを話し合える親子でいてほしいと思います。

伊藤慶孝(美術科教諭・大阪府)

今回の親子いっしょのワークショップでは、創意工夫する子どもの真剣な表情を隣で感じながら、自分も一所懸命にイメージを形にしようとする保護者の姿が印象的でした。最後の鑑賞会では、できあがった作品を前にしてイメージを造形であらわすことのおもしろさに充実感があったという発表が多くみられました。こうした場をこれからもつくり続けていきたいと思ひます。(参加:計60人) **浅見俊哉(SMF協力委員)**

